

【鵜匠の装具展示】

風折烏帽子

Q：鵜匠は何故この1メートルの布を頭に巻くのか？

A：

この、風折烏帽子と呼ばれる頭巾は、舟首に掛かっている燃える籠の炎や火の粉から鵜匠の頭を保護する。眉を守るため額の低い位置に着用し、余った布は頭の上に集められる。このように円錐形にすることで、漁師のまげを収めるスペースが設けられる。まげは、19世紀後半に廃止されるまで、漁師の髪型として浸透していた。この形状はまた、「風折烏帽子」という名前のもとにもなっている。平安時代（794～1185年）に宮廷人は、烏帽子と呼ばれる背の高い円錐形の帽子を着用していた。風折は、「風によって曲げられた」という意味である。

胸当

Q：この装束の目的は？ 二重に折り畳んであるのは何故？

A：

胸当は、鵜匠の衣服に火の粉が入るのを防止するエプロンのような上着である。漁師の服（漁服）は、着物のように体の周りに巻かれる。その際、首の下には隙間があいている。胸当は、この隙間の上に着用するものであり、紐を使い、漁師の首の後ろの適当な位置に結ばれる。胸当は二重になるよう折り畳まれている。二重にした胸当の横の片側が開いており、小物を入れるポケットの役目を果たす。

漁服

Q：漁師の服の色が濃紺や黒なのは何故？

A：

鵜匠が重ね着の一番下に着ているのは、漁服（袖が細く裏地が無い着物とでも言うべき綿の服）である。漁服は、漁師の姿が水中の鮎に見えないよう、無地、暗色となっている。また、暗色は、光るものや白いものに警戒心を持つと言われる鵜に配慮した色でもある。漁服の長さは足首までであるが、鵜匠は下の方をたくし上げ、ひざまで届くくらいの長さになっている。これにより、動きやすさが確保される。

腰蓑

Q：蓑で作られたこの装束の目的は？

A :

藁のスカートとでも言うべき腰蓑は、鵜匠の下半身の衣服が鮎の油や粘液で汚れるのを防ぐ役割がある。また、鵜匠が鵜を操るために舟から身を乗り出すとき、水しぶきで濡れたり冷えたりするのを防ぐ役目もある。腰蓑はもち米の藁を織って作る。もち米の藁はそれ自体、水をはじく性質があり、川での作業には理想的な素材と言える。典型的には、鵜匠はこれらの手織りの装束をシーズンあたり3～5着使い古すことになる。

足半

Q : この草履のサイズが標準的な草履の半分しかないのは何故？

A :

陸地では、通常の長さの草履が便利である。しかし川で履く場合は、通常の長さの草履は川の流れを受けるため、歩きにくく効率が悪い。これらのハーフサイズの草履は水の抵抗を少なくし、同時に、鵜匠が藻で覆われた岩の上や舟の底にたまる水の中を滑らずに移動することを可能にする。織った藁は、他の滑らかな素材に比べ大きな摩擦を有し、滑る危険を減らすことができる。

次のシーズンに向けての準備

鵜飼シーズンは10月15日に終了する。冬の間、鵜匠は器具を修理し、来シーズンの新しい服を手作業で丁寧に仕上げる。新しい足半と腰蓑が、伝統技術を用いて米藁から手織りで作られる。繊維をより柔らかく、ねじりやすくするため、藁の束ははじめに木槌で叩いてから織り合わせる。米藁の切り口をより合わせ、そのねじった撚りの間に棕櫚の細い紐を編み込んで一つにすることで、腰蓑を作る。重ね合わせる部分を多く確保した上で、腹に巻くのに十分な幅になるまで、より多くの米藁の撚りを加える。一つの腰蓑を作るのにおよそ3日を要する。足半作りはかつて地元農民に共通の副業であり、鵜匠はただ出来たものを購入するだけだった。しかし今日では、鵜匠は自分で履物を作らなくてはならない。

鵜匠が冬に行う主な仕事は、舟の篝火の燃料を確保するため松の丸太を割ることである。薪は籠の中で素早く燃えるよう、適切なサイズと形状である必要があり、使用前、数か月間は乾燥しなければならない。毎晩の漁で2～3束の木を消費するため、シーズンあたり合計で300～350束の消費量となる。